

13

ビルロート教授（ウィーン大学）の 医学的業績と彼の音楽サロン

—医学史・音楽史のコラボ—

権藤 寿昭

ごんどう外科胃腸科クリニック

ビルロートといえば御存じの通り、胃癌患者に対する胃切除手術の歴史的開拓者であるのは多くの方の知るところであるが、彼にはもう一つ別の顔がある。それは、彼の趣味である音楽において、単なる愛好家というだけでなく、友人はだしの音楽家という面をもっていたという事である。彼の肖像画が、ウィーン大学医学部だけではなく、ウィーン学友協会にも所蔵されているという事実がそれをよく象徴している。彼と、当代のそうそうたる顔ぶれの音楽家達との交流、特に大作曲家ブラームスとの交流は有名である。ビルロートの本職である医学上の略歴であるが、学生時代から、解剖学と病理学にはたいへん興味を持っていたそうである。親友にゲオルク・マイスナーがいた。（マイスナー神経叢で有名です。）また、グレーフェ徴候で有名な眼科医グレーフェのもとにも、一時期熱心に訪れていた。病理学者メッケルや生理学者ミュラーとも仕事をしていたことがあった。学士論文は「両側の迷走神経を頸部で切断した後の肺の変化の性質と原因」というもので、また「血管の発生について」という論文で教授資格を得た。彼は、1853年（24才時）にベルリン大学のランゲンベック外科教授の元で助手に就き、その後、眼科兼外科で1860年にチューリッヒ大学教授に就任した。その後‘65年、チューリッヒにおいて、ブラームスと初めて会っている。伝えられるところでは、チューリッヒ大学に赴任中、ブラームスが同市内に来ていることを耳にして、自宅に招待したそうである。彼との初対面の場において、自ら楽器を演奏し、大いに意気投合したということである。彼は若い時、興味が上記の病理・解剖だけでなく、ピアノ・ヴァイオリン等の楽器演奏をも嗜んでいて、相当の腕前を持っていたそうである。ブラームスとの会見の後、1867年ウィーン大学医学部外科教授に就任した。所謂、音楽の都ウィーンという土地柄のこと、彼はブラームスとの交流を益々深め、更にブラームスに繋がりのある音楽家たちとも、交際を開始し、人脈を広げていった。例えば、クララ・シューマン（大作曲家ロベルト・シューマンの未亡人で、名ピアニスト）、ヨーゼフ・ヨアヒム（名ヴァイオリニスト）、ハンス・フォン・ビューロー（名ピアニストで、かつベルリンフィルの初代常任指揮者）等々、こうした面々との交際を非常に大事にし、終生継続させていったわけで、ウィーン大学在職中に彼にベルリン大学より外科教授に招聘の話があった時、ブラームス達と別れるのは忍びないとして、この話を断ったという有名なエピソードまで残している。ウィーンの彼の自宅では、時折前述のマエストロたちや、彼の処の医局員（ピアノのうまい医局員が居ったそうである）や、彼の家族たちと共にホーム・コンサートが催されたりするなど、華麗なビルロートの音楽サロンが形成されていった。彼の本職の話に戻ると、医史的には、胃癌患者に最初に胃切除を行ったのは、フランスの外科医ジュール・ペアンである。（Jules Pean:1879年。だが術後5日目に患者は死亡し、失敗に終わった。）その2年後1881年に、ビルロートが胃癌患者の胃切除手術を施行し、史上初めて成功させた。（術後約半年生存。死因は癌の再発。）その胃切除の方法をビルロート一法と名付けたのは、コッヘルという甲状腺外科医（スイス）である。以上の経緯中で、外科系の医師にとっては耳に馴染のあるペアン、コッヘルといった手術器具の名称が出てきたが、言うまでもなくこれらは、この二人の外科医の名前を冠して、その後頻用されてきた手術器具として現在に至っている。ビルロートはその後ビルロート二法という術式をも編み出した。他に喉頭癌の手術を成功させるといった業績をも残している。本日の演題では、以上のそういった経緯を述べ、更に前述の音楽的な事柄についての内容・エピソードをも述べてみたいと思う。